

教員養成における英語指導力向上のための
小学校英語ワークショップ

English Workshops for Elementary Pupils to Enhance English
Teaching Skills in Pre-service Teacher Education

奥村 真司

OKUMURA Shinji

武庫川女子大学 学校教育センター年報

第2号 2017年

【実践報告】

教員養成における英語指導力向上のための小学校英語ワークショップ

English Workshops for Elementary Pupils to Enhance English Teaching Skills in Pre-service Teacher Education

奥村真司*

OKUMURA, Shinji

キーワード：教員養成 小学校外国語活動 英語指導力 状況的学習

1. はじめに

最近の急速なグローバル化に伴う英語教育への機運の高まりから、文部科学省は英語教育の拡充を言語教育政策として進めている。具体的には、2014年に「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」を公表し、小学校から高等学校の各段階を通して英語教育を充実させ、児童・生徒の英語力向上を目指している。小学校段階については、小学校中学年で活動型英語教育、高学年で教科型英語教育を行うことが明示され、2020年の学習指導要領改訂から正式に導入される⁽¹⁾。

しかしながら、このような小学校英語教育の拡充に向けた体制づくりにおいて、指導者の養成と研修が大きな課題となっている。日本英語検定協会による現職教員へのアンケート調査によると、現在の小学校外国語活動における課題点として、第1に「教員の指導力・技術」、第2に「指導内容・方法」が挙げられている(日本英語検定協会, 2014⁽²⁾)。文部科学省も今後の小学校英語教育拡充には、高度な英語力と指導法を身に着けた教員の養成及び採用が必要であることに言及している(文部科学省, 2014⁽³⁾)。また、その養成課程においては、教材開発や小学校における教室運営など今まで以上に実践的な内容を取り扱うべきであるとしている(文部科学省, 2014⁽⁴⁾)。さらには、最近の小学校教員採用試験において、英語の筆記試験を行ったり実技試験の中に「外国語活動」を課したりするなど、小学校英語教育に対応できる人材を採用する取り組みを行う都道府県及び指定都市の教育委員会が多くみられる(文部科学省, 2016⁽⁵⁾)。

このような背景から、筆者は2015年度より所属大学にて児童英語教育ゼミナールを開講し、学生が地域の児童を対象にした英語ワークショップを企画、実行している。このワークショップは、児童が課外で英語に親しむ機会をつくるとともに、教員を志望する大学生が小学校英語教育の指導力を身につけることをねらいとしている。本稿では、実践的教員養成トレーニングの側面に焦点をあて、これまでの経過と2016年前期のワークショップの取り組みについて詳述する。

2. 小学校英語ワークショップ

2.1. 2015年の活動

2015年は、近隣の公立小学校2校の希望者を対象にワークショップを行った。概要は表1の通りである。筆者による活動の観察と学生のフィードバックから、4年生は、対象児童の特性や知的発達段階を考慮しながら多様な活動を計画したことが認められた。また、3年生は主に教材教具制作を担当したが、さまざまなアイデアをもとにした効果的なものを作り出す工夫をしていた。しかしながら、

* 教育学科講師

多くの学生が今後の課題として、ワークショップの活動を事前に十分に把握しておくこと、活動中の指導者同士の連携を密にすること、さらには指導者が自信をもって活動や支援にあたることなどを挙げていた。

表1 2015年度小学校英語ワークショップ概要

	第1回 10月24日(土)	第2回 11月14日(土)	第3回 11月24日(土)	第4回 12月5日(土)
10:30 - 11:30	低学年	高学年	低学年	高学年
活動内容	ハロウィーンのビデオ視聴、クイズ、歌、ゲーム	歌、ゲーム、コミュニケーション活動	歌、ゲーム、ストーリーテリング、ダンス	歌、いろいろなゲーム、ダンス
13:00 - 14:00	高学年	低学年	高学年	低学年
活動内容	ハロウィーンについて(異文化理解)、歌、ゲーム、ストーリーテリング、コミュニケーション活動	歌、ゲーム、ストーリーテリング	歌、ゲーム、コミュニケーション活動(ショッピングゲーム)、ダンス	歌、いろいろなゲーム、ダンス

2.2. 2016年度の活動

2016年度は所属ゼミ学生との話し合いのもと、前期2回、後期3回ワークショップを行うこととした。前期のワークショップの概要は表2の通りである。今年度のワークショップにおいては、前年度のワークショップへの反省をもとにいくつか新しい試みを取り入れた。以下、その内容について述べる。

1) コンテキスト重視の言語活動の導入

外国語を含む第2言語の学習活動においては、語彙や文法の理解と習得が重要であることは言うまでもないが、言語をコンテキスト(context)の中で使用するという経験を積み重ねることも大切である。例えば、マーケットでの買いものやレストランでの注文は、言語の使用状況が明確であり、話者の発話はある程度決まった談話(discourse)構造に沿って行われる。したがって、このような状況の中で目標言語を練習することによって、コミュニケーション能力の獲得が期待できる。また、年少者の言語活動におけるコンテキストとして、絵本などのストーリーが考えられる。ストーリーには、結束性(cohesion)があり、実際の言語使用場面に近いコンテキスト、つまり擬似空間を得ることができる。キャメロン(Cameron, 2001⁽⁶⁾)は、「ストーリーは、言語によって作られる創造の世界を提供する。子どもたちは、その世界に入り楽しむとともに言語を学ぶことができる。」と述べている。またキャメロンは、ストーリーには、繰り返し用いられる言葉や表現が含まれており、それが言語学習にとってもっとも役に立つものと主張している(Cameron, 2001⁽⁷⁾)。

表2 2016年度前期のワークショップ概要

	第1回 6月4日(土)	第2回 6月11日(土)
13:00-14:00	低学年	高学年
活動内容	ストーリー:「ペネロペ」 動作に関わる単語導入, ジェスチャーゲーム, ダンス	訪問国: アメリカ チャンツ(値段の聞き方の表現), クイズ(アメリカの貨幣について), 会話活動(ショッピングゲーム), ダンス
14:30-15:30	高学年	低学年
活動内容	訪問国: カナダ チャンツ(時間に関する表現), 会話活動(時間に合わせてカナダの街で行動し目的に応じた会話をする活動), カナダに関するクイズ, ダンス	ストーリー:「メイシーちゃん」 数字チャンツ, ゲーム(アニマルバスケット, 伝言ゲーム), ダンス

2016年度のワークショップにおいては、コンテキストと言語活動の関わりを重視し、児童の発達段階に応じて、低学年ではストーリー、高学年においては英語圏の国への旅行を毎回の活動に取り入れることとした。表2に示されている通り、低学年では、外国の絵本、「ペネロペ⁽⁸⁾」と「メイシーちゃん⁽⁹⁾」を活用し、チャンツ⁽¹⁰⁾によるターゲット⁽¹¹⁾の練習、ターゲットを含むゲームを行った(写真1)。また、高学年では児童一人一人が、大学生手作りのパスポートを持ち、カナダとアメリカを訪問し、現地で行動する状況において単語練習と会話活動を行った(写真2, 3)。これらのテーマ設定について、学生から次のようなフィードバック⁽¹²⁾があった。

4年生A「低学年はストーリーを活用することで、児童が意欲的に自然な英語を発することが改めて実感できた。」

4年生B「1時間をストーリー化することによって、子どもたちが初めての場所で、何も知らない状況の中、お互い知らない子どもと一緒に楽しめるだろうかという不安感を少しでも減らすことができると思う。」

4年生C「パスポートを使って出入国をすることでリアリティのある活動ができた。」

4年生D「旅行ということを明示していたからこそ、子どもたちが今日何を学ぶのか理解しやすかったのかなと思う。」



写真1 低学年の活動の様子（ゲームの場面）



写真2 高学年の活動の様子（入国審査の場面）



写真3 高学年の活動の様子（買い物ゲームの場面）

2) 「状況的学習」の場の設定

「状況的学習」(Situated Learning) (Lave & Wenger, 1991⁽¹³⁾) とは、さまざまな社会的活動に参加することによって知識と技能を体得することである。筆者は、ワークショップに関する一連の活動を「状況的学習」の場と捉え、ゼミの学生を学年の枠を超えた低学年グループと高学年グループという2つのコミュニティの中で活動を促した。「状況的学習」の場では、コミュニティの参加者は、さまざまな場面や媒体上でアイデアを出し合ったり、教え合ったりする。ゼミの学生もグループごとにコミュニケーションアプリLINE上で情報交換をしたり、ミーティングの場で活動案を作成したりした。また、4年生がワークショップでは指導の中心的役割を持ち、3年生はそのサポートとして活動する分担制も確立した。このような体制の確立は、レイヴとウェンガー (Lave & Wenger, 1991)が提唱する「正統的周辺参加」(Legitimate Peripheral Participation)の概念⁽¹⁴⁾を基としている。サポーターとしての役割を与えられた3年生は、ワークショップにおいて周辺の参加をし、児童の支援をしながら4年生の活動をつぶさに見学できる。この参加はワークショップにおける正式に認められた周辺の参加であるが、そこで学んだこと、つまり「状況的学習」によって得られた知識と技能は、次年度、中心的な役割としていかされる。その結果、4年生から3年生へのスムーズな役割交代に繋がるのである。3年生のフィードバックから、この周辺の参加を通してさまざまなことを学んでいることが読み取れる。

3年生A 「ワークショップで子どもと話すとき、先輩方は同じ目線になって話をされていました。そうすることで子どもは私たちと話しやすくなるので、同じ目線になることはとても大切なことだとわかりました。また、褒めることの大切さを学びました。子ども

を褒めることでやる気や自信につながり、学習の楽しさを感じることができるとわかりました。」

3年生B 「子どもたちの雰囲気が大人しそうで、不安な子がいたとしても、先生はとにかく笑顔で、楽しそうに、子どもたちの前に堂々と立つことで、子どもたちは授業についてきてくれるということがわかりました。授業内容の順番によって、子どものテンションをどう持っていきたいかも考えることが大切だと学びました。また、先生同士の情報共有や、授業計画をしっかりとしておくことで、よりスムーズでよい授業が行えると実感しました。」

また、4年生も前年度の経験をいかし、3年生にとって良い学びの機会になるように行動することによって、新しい学びが生まれていることがフィードバックから明らかになった。

4年生E 「3年生との連携がとても大切であることを学んだ。3年生には、教材の準備を行ってもらうので、見本を示したり、必要な数を伝えたり、授業の流れを共有する等、その教材のイメージができるようにした。また、リハーサルにもなるべく参加してもらうようにし、3年生に事前に補助を頼み、一緒に練習することで、ワークショップで連携しやすくなる感じた。」

4年生F 「3年生には主に教材作りをしてもらった。しかし、去年私たち自身も教材作りをしていたが、指導案作りや活動のアイデアの出し方などをもっと先輩から聞けばよかったという反省があったので、今回3年生には教材作りに加えて指導案作成のアイデアを出すところやリハーサルでは子ども役で参加してもらおう等、来年すぐに取り組めるように配慮した。後期ではもっと指導案作りに参加してもらい3年生、4年生のチームワークを発揮したい。」

3) 教室英語表現活用能力向上のための方策

小学校英語教育における高度な英語指導力として、教室英語を効果的に使用することが挙げられる。教室英語表現は、例えば“Hello”や“How are you?”などの基本的挨拶表現から“Stand up”や“Come here”などの動作の指示など、場面に応じたさまざまな表現が含まれる。小学校英語教育においては、英語の音声に慣れ親しむことが重要であることから、教師の発話する教室英語は、そのモデルになるべきものである。バトラー後藤（2015）は、小学校英語教育における音声モデルに関して、ネイティブスピーカーによるものだけでなく、応用範囲の広いわかりやすい英語を提唱している。また、そのような英語は児童にとって質の高いインプットになると述べている⁽¹⁵⁾。

したがって、小学校英語教育を担当する教員は、表現を覚え使用するだけでなく、その発話が良質のインプットになるよう、英語のリズムなどのプロソディー（韻律）を捉えながら発話練習する必要がある。このような教室英語の練習の重要性を考え、筆者は教室英語表現集を作成するとともに、アメリカの大学に1年間留学した4年生に依頼し、表現集に基づく発話モデルの動画を作成した。その動画は、ゼミの学生が日常的に教室英語モデルをインプットすることができるよう、コミュニケーションアプリ LINE で配信した。また、モデルとなった4年生から教室英語に関するレッスンを受けた

いという希望が3年生からあり、前期の後半から3年生ゼミの時間を活用し英語レッスンを行っている。教室英語に関する英語レッスンについては、3年生が次のような意識を持っている。

3年生C 「自分ひとりでは、頭では分かっているけど、出来ているのか、出来ていないのかも分からないので、一緒に教えて頂いてとても良い機会でした。みんなで揃えてリピートするだけでなく、舌の動きまで丁寧に説明して下さったり、一人ずつ言ってアドバイスを下さったり、正しい発音のためのポイントをつかむことができました。」

3年生D 「今まで何回も発音してきている英単語でも、細かい舌使いや唇の形など、少しでも良い発音になるように何度も練習しました。ワークショップをすることになるとやっぱりちょっとずつでも進行する側の私たちが英語を使っていかなければいけないし、使っていく中で正しい発音を子どもたちに聞かせなければならぬので、ちょっとでも気になった発音などを、自分たちで見つけて何度も繰り返して発音するという練習がとても役に立ちました。」

3. 後期ワークショップに向けて

学生は前期の活動を振り返りそのフィードバックを後期のワークショップにいかそうとしている。教員志望の学生が行うワークショップは、教員養成におけるトレーニングの場であると同時に、参加する児童にとっての課外英語学習の機会でもある。学生は、児童の英語学習の場という視点も持ちながら、ワークショップに取り組んでいる。以下、学生のコメントである。

3年生E 「先輩方や、同期の学生が子どもたちと関わり、楽しそうにしている姿を見て、私も子どもたちともっと関わりたいと思うようになった。よい見本に習い、後期のワークショップでは、積極的に子どもたちと関わり合い、そこからより多くの学びを得たい。」

3年生F 「後期のワークショップでは、前期に学んだことをいかして活動していきたい。今まで以上に子どもたちと、積極的に英語を使って関わっていくことが私自身の課題である。」

4年生G 「前期の反省点をいかし、よりよい活動にしていきたいと思う。そのためにも、私ただけだけでなく、3年生の力も借りてより多くの視点から活動を考え私自身にとって、また子どもたちにとってもこのワークショップが英語の楽しさを感じられる場所であるために、努力を惜しまず、よりよい活動を創っていきたい。」

4年生H 「半年後には現場で指導する立場になるので、そのこともより一層頭に入れながら、子どもたちに英語を慣れ親しんでもらえるようクリエイティブな活動を考えていきたい。また、3、4年生のコミュニケーションをもっととり、皆が生き生きできる活動を展開したい。」



写真4 3年生対象の教室英語レッスンの様子

4. おわりに

地域の教育委員会及び小学校数校と連携しながら、継続的および体系的に実践的英語指導力を向上させる場は大変貴重である。ワークショップの計画、準備、実施の各活動を通じて、学生が自分自身の英語指導能力の向上を目指している点については、このワークショップが教員養成における小学校英語指導トレーニングとして機能していると考えられる。

今後の課題としては、最近の英語教育におけるICT活用重視を鑑み、ICTの活用の多様性を考慮した試みを模索し、質の高い小学校英語指導者養成の場としての機能を充実させたい。

注

- (1) 活動型英語活動はコミュニケーション能力の素地を養うことをねらう。教科型英語教育は初歩的な英語の運用能力を養うことをねらう。
- (2) 日本実用英語検定協会『小学校の外国語活動及び英語活動等に関する現状調査』, 2014, http://www.eiken.or.jp/association/info/2014/pdf/20141028_pressrelease_report2013.pdf (検索日 2016年10月26日)
- (3) 文部科学省『グローバル化に対応した英語教育改革実施計画』, 2014, http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/_icsFiles/afieldfile/2014/01/31/1343704_01.pdf (検索日 2016年8月16日)
- (4) 文部科学省『今後の英語教育の改善・充実方策について 報告～グローバル化に対応した英語教育改革の五つの提言～』, 2014, http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/102/houkoku/attach/1352464.htm (検索日 2016年10月4日)
- (5) 文部科学省『平成27年度公立学校教員採用選考試験の実施状況について』, 2016, http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/senkou/1366695.htm (検索日 2016年10月26日)
- (6) Cameron, L. *Teaching Languages to Young Learners*, Cambridge University Press, 2001, p.159. (検索日 2016年9月2日)
- (7) 前掲, p.169.
- (8) 著者はゲオルグ・ハレンスレーベン(Georg Hallensleben)とアン・グットマン(Anne Gutman)。
- (9) 著者はルーシー・カズンズ(Lucy Cousins)。

-
- (10) 児童英語教育でよく使われるリズムに英語を乗せて発音する学習方法。
- (11) 学習目標となる言語事項のこと。
- (12) 前期のレポート課題として記述した。本稿への使用については、氏名を非公表とすることを事前に伝え承諾を得た上で掲載している。
- (13) Lave, J. & E. Wenger. *Situated Learning: Legitimate Peripheral Participation*. Cambridge University Press, 1991.
- (14) 前掲
- (15) 前掲、p.176.